

第21回市民コンサート
新交響楽団名曲コンサート

10月27日(日)PM 2:00
羽生市産業文化ホール(大)



指揮：芥川 也寸志
独奏：須田 真美子

ベルリオーズ
H. Berlioz

序曲・ローマの謝肉祭 作品9

ベートーヴェン
L. V. Beethoven

ピアノ協奏曲第5番変ホ長調 作品73「皇帝」



チャイコフスキー
P. I. Tchaikovsky

交響曲第4番ヘ短調 作品36



1985

主催 羽 生 市
後援 羽生市教育委員会

I 序曲・ローマの謝肉祭 作品9

ベルリオーズ作曲

一般に歌劇では、第一幕の前に大きい序曲を置き、各幕間の前には、それぞれ短い前奏曲が演奏されるのが普通である。ところが19世紀におけるロマン派作曲家、エクトール・ベルリオーズは珍しくかつ興味ある試みとして、歌劇「ベンヴェヌート・チェルリーニ」の第二幕の前に大きな序曲を作曲した。この序曲はひじょうにすぐれていたため、のちに独立して序曲「ローマの謝肉祭」と呼ばれた。そうして、管弦楽演奏会のプログラムに加えられるようになったのであるが、このように第一幕前の序曲以外のものが、大規模な楽曲として残ったということは一つの特別な例外に属するのである。

II ピアノ協奏曲第5番変ホ長調 作品73「皇帝」 ベートーヴェン作曲

ベートーヴェンのピアノ協奏曲の最大のものである。だれがいいはじめたのかは知らないが、この協奏曲はよく「皇帝」と呼ばれる。まさにそのとおりであって、堂々としたところは王者のそれを想わせる。それでこう呼びはじめたものであろう。

したがってこの別名については、ベートーヴェンはまったくあずかり知らないところであるし、また「皇帝」とあとで呼ぶようになったとはいえ、それはなにもある特定の皇帝と関係づけてある、というものでもない。

さきの第4番で、独奏ピアノで開始する、という新しいゆきかたを試みたベートーヴェンは、ここでは第一楽章の冒頭を、独奏ピアノのカデンツァで開始する、という新しいゆきかたをしている。ために最初からきわめて豪華な印象をあたえる。

またこの楽章の終りのカデンツァのでるべき箇所では、ベートーヴェンはこれに類するものを自分で書いておいて、即興的にはいる従来のカデンツァのおこなわれることを禁止して「カデンツァは無用であって、そのままつづける」と注意している。

第二楽章を休みなしに第三楽章につづけているのは、前の第4番とおなじであるが、こんどのはその対照の妙がまことによく発揮されている。

III 交響曲第4番ヘ短調 作品36

チャイコフスキー作曲

チャイコフスキーの交響曲のなかで最も変化の多い、最も熱情的な曲である。のちに記すように、この曲は明瞭なプログラム（叙述的内容）を持っていて、純音楽の形式をとりながらも標題樂的な實質をそなえているが、ここにあらわされたものは、苦悩し彷徨する人間の姿であり、人間を追い廻し追いつめる運命の魔手であって、凄愴の感が聞く人を襲う。チャイコフスキーの特色とする旋律の暗い美しさ、構成のたくみさ、管弦樂の取扱いの妙、これらがこの曲を永久に愛されるものとしている。チャイコフスキーは友人の作曲家タニエフに「第4交響曲の一つの小節といえども、私が真に感じたものをあらわしていないのはなく、また私の心の秘奥を反映していないのではない」と書き送った。この曲はチャイコフスキーが不幸な結婚に悩んでいた時代の産物だから、その悩みがここに反映するのは当然であろう。

〔新交響楽団〕

新交響楽団は、1956年3月に創立されて以来、会社員・自営業・主婦・学生など様々な職業を持つ百余名の団員により、自主的に運営されているアマチュアオーケストラである。創立以来音楽監督芥川也寸志の指導のもとに、ベートーベン全交響曲の連続演奏会などの意欲的な企画のほか、国内演奏旅行、ソビエトへの国外旅行など、多岐にわたる活動をおこなってきた。

1976年の創立20周年記念演奏会「日本の交響作品展」により、「芥川也寸志と新交響楽団」はアマチュアオーケストラとしては初めて第8回サントリー音楽賞を受賞、以来この邦人作品シリーズは毎年1回ずつ継続されている。また1979年の第86回演奏会以来、名誉指揮者山田一雄の指導により、グスタフ・マーラーの交響曲に取り組み、マーラーシリーズはこれまでに7回を数えている。

現在新響は、公共機関や民間団体からの財政的援助は一切なく、団員自身の負担と観客の中から組織された維持会制度に依って運営されている。その目的は、音楽を楽団員自ら楽しむことと共に、演奏を通じて広汎な人々と接し、我が国の文化的発展に寄与しようとするところにある。さらに新響は年4回の自主演奏会の他に、公共団体・学校等の依頼演奏会など演奏の場を常に広く求め、1986年の創立30周年を目前にしてアマチュアオーケストラの可能性を最大限に追及している。

〔芥川也寸志〕

作曲家、1925年東京に生まれる。1947年東京音楽学校本科作曲部を卒業。1956年新交響楽団の創設以来、音楽監督として同団の中心的存在である。

主要作品は、「交響管弦楽のための音楽」「弦楽のための3楽章」「交響曲第1番」「エローラ 交響曲」「オスティナータ・シンフォニカ」「チェロ協奏曲」「オーケストラのためのラブソング」など。広島をテーマにしたオペラ「ヒロシマのオルフェ」でザルツブルグオペラ賞を受賞するほか、国内の各種音楽賞を数多く受けている。

1955年には上海交響楽団を指揮して自作の演奏会を行ない、1961年には、小提琴協奏曲「梁山伯と祝英台」の日本初演を行なった。

また、アマチュアリズムの追求と、社会の隅々までも浸透するような音楽活動を通じて、文化の創造に寄与することをその根本理念とする彼の存在は、新響を今日あらしめらた原動力でもある。

現在、日本音楽著作権協会理事長、日本作曲家協議会委員長、アジア作曲家連盟常務理事。

〔須田真美子〕

桐朋学園高校音楽部卒業後、フランス政府給費留学生として渡仏、パリ国立音楽院ピアノ科入学、同校首席卒業、ロジェ・デュカス特別賞受賞。江戸弘子、井口基成、レイモン・トゥルアール、ウラド・ベルルミュテール、ベンジャミン・カフランの諸氏に師事。

74年スペイン、ハエン国際ピアノ・コンクール第3位、80年ロンドン、モーツァルト・コンクール・ピアノ部門第1位。現在まで、国内外で、多くのソロ演奏やオーケストラとの協演をし、本年2月第11回ショパン協会賞を受賞している。

彼女の堂々とした構成力と鮮やかな技巧は、ピアノという楽器を弾くという不自由さを聴き手に感じさせず、その技の向うにある“美”を追求し、豊かな音楽へと、仕立てあげるのである。